

すい ど ち

水土の知

2021 **06**
Vol.89 / No.06

小特集 研究・教育を担う人材育成と学術評価のあり方



農業農村工学会誌

Water, Land and Environmental Engineering

Jeonbuk National University

ISSN : 1882-2770

農業土木學會誌 (水土の知) 농업토목학회지

VOL.89 NO.6

 WILL JOURNAL INC.



JSIDRE

SINCE 1929

業農村工学会

Drainage and Rural Engineering

農業農村工学会誌 第89巻第6号

目次

ページ			
巻頭	追悼文 第15代会長故田淵俊雄先生のご逝去を悼む	東京大学名誉教授	山路永司
1	展望 研究・教育を担う人材育成と学術評価	農研機構農村工学研究部門	藤原信好
3~14	小特集 研究・教育を担う人材育成と学術評価のあり方		
3	博士課程の学生との交流を通じた研究室の活性化	岐阜大学応用生物科学部 近畿大学農学部 東京大学大学院農学生命科学研究科 近畿大学農学部	乃田啓吾 木村匡臣 浅田洋平・謝文鵬 松野裕
7	実践型教育の現状と産学官連携による人材育成の取組み	福島大学農学群食農学類	申文浩
11	開発途上地域における農業研究と求められる人材	国際農林水産業研究センター	進藤惣治・泉太郎
15	小特集<参考資料>：今回の小特集テーマに関連する既刊の小特集一覧		
18~39	小特集関連特別寄稿 博士号取得者からの提案		
18	博士後期課程から公設試験場へのキャリアパス	北海道立総合研究機構中央農業試験場	小杉重順
20	フィールドサイエンティストの育成意義と異分野との交流	国立環境研究所福島地域協働研究拠点	辻英樹
22	学生への卒業研究指導を通して得た気づき	北里大学獣医学部	島本由麻
24	私にとっての博士号取得の動機と意義	(一社)地域環境資源センター	草光紀子
26	農業土木コンサルタント業務での博士活用の課題と提案	(株)三祐コンサルタンツ	伊藤夕樹
28	博士課程と建設コンサルタントの私	NTCコンサルタンツ(株)	長岡誠也
30	農業農村工学の人材育成に望むこと	(株)安藤・間建設本部土木技術統括部土木設計部	塚田泰博
32	社会人から目指した研究者への道	農研機構農村工学研究部門施設工学研究領域	泉明良
34	“高専発高専行”の大学院生活	松江工業高等専門学校環境・建設工学科	周藤将司
36	行政職としての博士課程取得の意義	内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局	金子武将
38	地方国立大学出身の学位取得者のキャリアパス	国際農林水産業研究センター	岡本健
41	レポート 農業農村工学サマーセミナー2020活動報告		
		京都大学大学院農学研究科 農研機構 福島大学環境放射能研究所 農研機構 鳥取大学大学院連合農学研究科	鈴木友志 浅田洋平 辰野宇大 松田壮顕 大山幸輝・加藤諭
46~57	技術レポート		
46	北海道支部：ため池の耐震改修における概算工事費算定手法の検討	北海道農政部農村振興局農村整備課 北海道石狩振興局産業振興部整備課 日本工営(株)札幌支店	赤坂浩・小林義宗 平山友彰 橋本和明

48	東北支部：小水力発電における非灌漑期水利権の取得事例	豊沢川土地改良区 佐藤光広
50	関東支部：伊達方農道整備における軟弱地盤対策工法の選定とその効果	静岡県中遠農林事務所農地整備課 鈴木大貴
52	京都支部：推進工法による底樋管の敷設と安全対策工事	大阪府中部農と緑の総合事務所耕地課 中野千治・北嶋竜也
54	中国四国支部：コンクリート表面の被覆塗装劣化に伴う塗替え	(独)水資源機構経営企画部 田村英介 (独)水資源機構香川川用水管理所 阿部耕三
56	九州沖縄支部：干潟排水対策施設「タイドプール」の維持管理上の課題と対策	九州農政局有明海岸保全事業所 山口信司・佐藤健司・遠矢 覚
59~82	コミュニティ・サロン	
60	Cover History 再整備途上の一ノ井堰	
	—表紙写真由来— —京都府京都市—	脇谷芳招
64	部会報告 第43回農業農村情報研究部会勉強会開催報告	
	—農業農村地域における情報利活用の未来図—	
65	通信教育 技術者継続教育機構 第189回通信教育問題	
69	支部講演会報告 関東支部(第71回)	
76	学会ニュース	
82	書評 地球がうみだす土のはなし(大西健夫・龍澤 彩文, 西山竜平 絵)	京都大学大学院農学研究所 中村公人
83	インフォメーション・コーナー	

【表紙写真講評】再整備途上の一ノ井堰(脇谷芳招)

共生観の視線— かつてはどこでも、街中でだって用水路を見かけた。散歩、そぞろ歩きの格好な場所でもあったはずだ。旅に出て、用水脇の草むらに座って缶ビールを浸し、サイコーの気分を味わった思い出も数多くある。そんなときの水音、吹いていた風や匂い、日射しの感じが「風景」という概念の重要な中身になっているかもしれない。日本に水は豊かだと思っている。その原景、私の頭の中の豊かな水は水田に取り入れられる水の姿で、農業の広がりとともに作られてきたものだったのかなと思うほどだ。

ヨーロッパ各地のような多様な地形のあるところでは風車によって取水・排水を行う装置技術も発達して動力によって水をくみ上げ用水路に流す農地も多いが、日本では自然流下の水が田畑を潤してきたという先入観がある。しかしその思い込みはひとえに山と海の間が近かった、その山も急峻で流れを散らさなければ氾濫する、そこから川を分け水を広げていくので水の風景が多くなった、という事情によるものだったのではないか……。その事情がそのまま私たちの風景観の源泉になっているように思う。

写真の洛西地域の用水の柱である桂川も氾濫の多い川だ。近年もしばしば豪雨と氾濫、橋の流失などの姿を目の当たりにする。治水目的も重視した用水路改修が急がれているようだが、写真の穏やかな水音が涼しげに聞こえてくるような世界からは想像ができない。そのギャップの記憶もまた私たちの風景観の内容である。

そよとした風とさんさんと注ぐ日射し、台風の豪雨と奔流、そして水の中に点々と残る家屋の姿。私たちの風景観の多くが農業の姿と切り離せないものであるとすれば、それは美しい田園風景、それからもたらす水のさまざまな姿・状況も透かし見る内容になっているだろう。自然の静かさも氾濫などの恐ろしさも、農業を通じて実感してきたのだといえるだろう。だからこの穏やかな写真は、急に転換する場面も同時に想像させる。その源は私たちの中に棲む、自然との共生観にあるのかもしれない。

(講評 東京造形大学名誉教授 柳本尚規)